「鮨を弘める～つながりを知る」

●漁師を育てる

鰺、トリ貝、青柳、さより……、初夏を飾るすし種の数々。
すしを食べたくなる季節です。

ところが現代日本は、魚介類の消費量の減少、漁師の後継者不足など、回転ずしを支える漁業の継続が難しい状況です。そこで、ある回転ずし業者が「天然魚プロジェクト」を立ち上げたとメディアが取り上げました。

これは、漁師と消費者をつなぐことで、消費者にはコストを下げ、漁師に収入を保証する計画です。全国各地の漁船と「一船買い」という年間契約をすることで、漁師さんにとっては安定的な収入が生まれます、また、網にかかったものは丸ごと重さで買い取るので、ものによっては半値くらいにもなります。

今まで棄てていた魚もすべて商品化するので、新しい企画が生まれたり、さらに、餌や肥料に再利用もするそうです。ここまで徹底すると、すし屋が扱う業務の領域を超えて、生産から加工まで含めた総合的な取り組みといえます。最初は赤字でしたが、今では利益も生まれ、規模も大きくなり、儲けだけでなく社会的な責任で、「外食産業のプラットフォーム（基盤）」にしたいとこの業者は語っています。

●森を育てる

漁業の歴史の中で、人びとは経験的に、漁場の近くの森や林が魚を集めるということを知っていて、「森が魚を呼ぶ」、また「魚つき林」と表現しています。今、日本では約5万8千ヘクタールもの木々が、漁業を支える目的で保全されています。

森や林に降った雨は、葉や腐葉土の中に蓄えられ、栄養分が溶け、川から海へと流れます。海の中で、それは植物プランクトン、海藻などに摂取され、食物連鎖で魚介類などの動物タンパク質となります。さらに、魚介類は、漁獲、遡上、陸上動物の捕食などによって、再び陸に戻る仕組みの中にあります。

また、森林を育てるには、植林だけでなく、間伐などが重要になります。枝を払い、木を間引くことで太陽光が地表に届き、微生物が育ちます。さらに、木の根が地中深く張ると保水能力が高まり、水が濾過されます。そしてまた、間伐ができずに手入れが行き届かないと、台風や豪雨で木が倒れ、土砂崩れとなり大きな災害を引き起こします。漁業のプラットフォームは、そのままSDGsにもつながることになります。

●一滴に世界を、一呼吸に繋がりを

滴水（1821～99）は、修行時代、人生の大きな転機に出遇った禅僧です。

ある時、手桶に残った水を何気なく捨てると、師匠に「一滴の水をも活かせ。一滴の水を無駄にすることこそ殺生なり」と一喝されます。植木に撒いてやれば、その「いのち」が喜ぶだろうということです。彼はその後、この事を肝に銘じ、一滴の水に世界全体とのつながりを深く感得します。そして、滴水と名のり、師匠・儀山の教えを忘れなかったといいます。

ティク・ナット・ハン（1926～）は、エンゲイジド・ブッディズム（社会参加する仏教）を生きるベトナムのお坊さんです。彼は、『仏の教え　ビーイング・ピース』（中公文庫、1999年）という著書の中（68頁）で「この一枚の紙のなかに雲が浮かんでいる」といい、あなたにはそれが見えますかと問います。

なぜかというと雲がないと雨はない。雨がなければ木々は育たない。木がなければ紙はできない。さらに、木を伐る人、森や人間を育くむ太陽の光、その他いっさいがこの紙のなかにあるというのです。紙に書かれた文章を見ている「わたしたち自身もこの紙の中にある」のだから、この私と関係のないものは何一つないと言います。

ジョアンナ・メイシー（1929～）は、米国の仏教哲学者で社会活動家です。彼女は、難民チベット僧侶たちとの出遇いから、仏教を知ることをきかっかけにして、一般システム理論、ディープ・エコロジーを深く学び、平和や人権、環境問題へ取り組みます。その著『世界は恋人、世界はわたし』（筑摩書房、1993年）の書名の通り、わたしは世界とつながっていることを示します。

たとえば、今、無意識に一呼吸した空気の中には、無数の酸素と二酸化炭素の分子がありますが、その一つは、はるか昔の人の呼気の中にあり、また、未来の誰かの呼気の中にある可能性をいいます。そこから、私たちに、環境、他者、そして平和を意識する生き方や責任をそれぞれに考えさせてくれます。

現代人は、SDGsという形で問題を提起しますが、仏教の教えもまた、時間や空間を越えて、いのちの無限の連帯に生きる私ということを気づかせてくれます。

この一呼吸の中に、はるか昔、親鸞聖人が吸ったいた酸素分子があるかも知れないと思いを巡らせながら、間伐材で作った割り箸を使い、お鮨を頂く私が生まれるかもしれません。ただし、仏教ではその時、自身に慚愧とともに思いもよらない目覚めが伴います。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。